

年輪年代学的手法による 平城京跡出土木簡の検討

—平城第524次調査出土「皇」「太子」
削屑の事例—

1 はじめに

年輪年代測定では、概ね100層以上の年輪を有する試料を対象とするのが一般的で、年輪数が少ない小型の木製品にその手法が適用される機会は必ずしも多くない。一方、奈良文化財研究所では近年、主に同一材由来の推定を目的として、年輪年代学的調査手法を小型の出土木製品に対しても積極的に適用しており、特に平城第530次調査出土の斎串の調査では大きな成果をおさめた¹⁾。この結果を受け、筆者らは今後、同様の試みを木簡についても広汎に実施することを目指している。

今回、平城第524次調査出土の木簡削屑について試行的に年輪年代学的調査をおこない、一定の成果を得ることができたため、ここに報告する次第である。

2 平城第524次調査

平城第524次調査は、宅地造成にともなう事前調査である²⁾。調査地は平城京左京二条二坊十四坪およびその北に隣接する二条条間路に該当し、二条条間路南側溝である東西溝SD10575・SD10576の他、数条の東西溝や掘立柱塀などを検出した。

木簡は、奈良時代後半の二条条間路南側溝SD10575から14点（うち削屑13点）が出土し、また下層の東西溝SD10580から4,355点（うち削屑4,253点）が出土した。SD10580は奈良時代前半に遡る遺構で、検出時点で南北幅が最大約4.6m、深さが約65cm。東西溝と推定しているが、全体を把握できておらず、土坑の可能性もある。埋土は砂質土や粘土を主体とするが、下層は厚さ40cm前後の木屑層からなる。この木屑層から、木簡をはじめとする多くの遺物が出土した。

3 対象木簡

まず、SD10580出土木簡全体について概観しておく³⁾。SD10580出土木簡は削屑を主体とし、人名を記すものが占める割合が高い。また「戊亥」「辰巳」など十二支の記述も目立ち、日付あるいは時刻などを表すものとみられる。さらに「高殿下侍舍人」と書かれる木簡

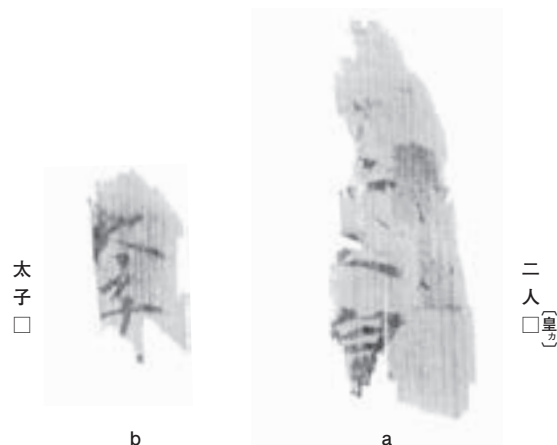


図43 調査対象木簡（原寸大）

の存在から、舎人の勤務管理などに関わる木簡群である可能性が指摘されている。年紀を有するものとしては養老7年（723）や神亀元年（724）と記す削屑が含まれ、SD10580や木簡群が奈良時代前半の遺構・遺物であることを裏づける。

今回の調査対象は、このSD10580出土木簡のうち図43の削屑a・b、計2点である⁴⁾。ともに柾目材で木目は酷似し、内容面からも両者は同一木簡に由来する削屑である可能性が高いとされる。ただし直接には接続しないため、便宜的に別木簡として報告されている。

4 年輪年代学的な検討

年輪幅の計測は、調査対象削屑を接写撮影し、Cybis社製年輪計測ソフトCooRecorderを用いておこなった。クロスデーティングは、SCIEM社製年輪分析ソフトPAST5を用いておこない、年輪曲線をプロットしたグラフの目視評価と、統計評価⁵⁾をあわせておこなった。両者に刻まれる年輪数は、aが18層、bが13層である。クロスデーティングは、bの年輪がaの3層目から15層目までと対応する関係で照合され（図44）、t値は8.0であった。図44の年輪曲線グラフで示すように、両者は年輪幅の前年に対する増減のみならず絶対値も酷似していると判断され、同一材由来の可能性が高い。

以上のようにa・bは年輪どうしが重複関係にあり、横方向の位置関係を特定することができる。したがって、接続の仕方としては両者が縦方向に並ぶか、あるいは重なりあうといった可能性が考えられる。そのため、記載内容を重視し、両者をa→bの順に配列して「皇太子」という熟語のまとまりを見出すこれまでの見解⁶⁾に対し、本年輪年代学的手法による検討結果は矛盾なく、むしろこの見解を支持するものといえる。ただし、bの最内層の年輪を基準として対応するaの年輪を配置し並べると、aからbにかけて文字列の軸線に右方向への若干の振れが生じるようにもみられる（図45）。

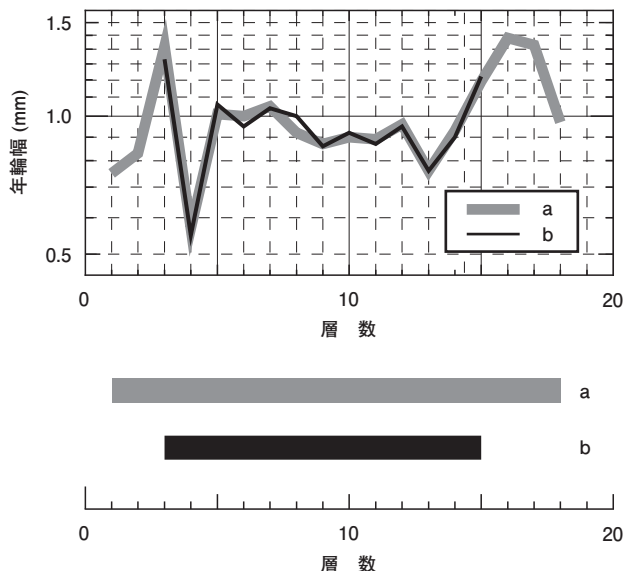


図44 調査対象木簡の年輪曲線（上）とバーチャート（下）

5 考 察

前述のようにSD10580出土木簡は養老・神亀年間（717～729）のものを中心とし、この時期の「皇太子」と言えば神亀元年（724）即位の聖武天皇（首皇子）を指すと考えられる。首皇子の居所は平城宮東張出部南半の東宮に求めるのが一般的であり、また東隣に構えられた藤原不比等邸（のちの法華寺）には安宿姫（光明皇后）が居住していた。平城第524次調査地は、その不比等邸のすぐ南側に隣接する。すでにSD10580出土木簡が首皇子の春宮舎人の活動に関わる資料群を含むとの指摘がなされているが⁷⁾、今回の調査でa・b両者が同一簡由来である可能性が高まったことにより、その想定はさらに高い蓋然性を得たといえるであろう。

一方、今回の調査成果からは、仮に対象の削屑2点がa→bの順で隣接するとすれば、文字列の軸線が若干右に振れることも判明した。さらに字配り（文字どうしの間隔）に関しても、aが比較的ゆったりと記すのに対しbの「太子」はかなり詰まっており、やや様相が異なるといえる。

そもそもa・bは直接には接合せず、年輪年代学的検討によっても提示できるのは接統の仕方の候補のみである。すなわち、a→bの順に並ぶ、逆の順に並ぶ、または両者が重なりあう（＝元の木簡の同位置から時期を異にして削り取られた）など複数の可能性があり、それ以上の絞り込みは難しい。したがって、a・bについてはこれまでどおり別断簡として扱うのが穏当であろう。

6 おわりに

今回の試行では釈読を改めるには至らなかったものの、2片の削屑が同一材から削り出されたものである可

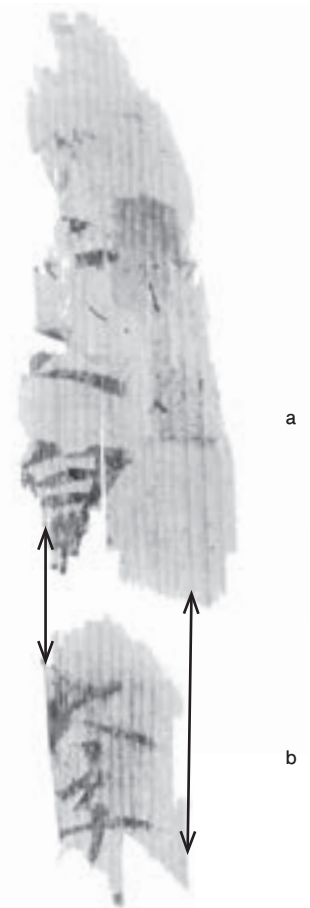


図45 調査対象木簡（1.5倍に拡大）に刻まれる年輪の対応（bの最内層を基準として、対応するaの年輪が真上になるよう配置）

能性を指摘し、また両者の横方向の位置関係についても言及することができた。おそらくもっとも小さな出土木製品のひとつであろう木簡削屑に対しても年輪年代学的手法の適用が可能であり、またそれにより一定の成果を期待しうることは提示できたものと思う。

なお、SD10580出土の削屑については、このほかにも同一材由来である可能性を指摘しうる試料群を見出しつつあり、詳細は別途報告する予定である。それらも含め、今後はより多くの木簡に調査対象を広げつつ、研究を展開してゆきたい。

（山本祥隆・星野安治）

註

- 1) 「右京一条二坊四坪・二条二坊一坪・一条南大路・西一坊大路の調査―第530次・第546次・第560次」『紀要2016』。『埋蔵文化財ニュース』166、2016。
- 2) 「平城京左京二条二坊十四坪の調査―第524次」『紀要2015』
- 3) 前掲註2。渡辺晃宏「奈良・平城京跡」『木簡研究』37、2015。『平城木簡概報44』2015。
- 4) 『平城木簡概報44』2015。aは11頁中段（30）bは同（31）である。
- 5) Baillie, M. G. L. and Pilcher, J. R. "A simple cross-dating program for tree-ring research" Tree-Ring Bulletin 33, 1973.
- 6) 前掲註3。
- 7) 前掲註3。